

総 括

狩野 紀昭

東京理科大学名誉教授

皆さん、今日は大変お疲れ様でございます。あと 10 分ほど頂戴したいと思います。

このプロジェクトが立ち上がったのは、ちょうど今年の 10 月過ぎぐらいだったかと思います。最初に考えていたことは、何としてでもこの本（『人間石川馨と品質管理』）を訳して、皆さんに伝えたいと思っていただけです。ただし、これはいろいろ、先ほどご紹介がありましたように 500 ページを超えていますので、とてもこれ全部は無理なのではないかと思って始めました。

まだ、そういうことを言うのは早いかと思うのですが、今回、まあまあ、大変成功したのではないかと。その成功の秘訣はどこにあるかという、やはり振り返ってみると、一番大きいのは組織委員に豊田章一郎さんに入っていた、これが何と言っても一番大きいのではないかと思います。幸い、今年の 10 月～11 月初めぐらいに、個人的に用事があって、豊田さんにお話しするチャンスがありました。そのとき、前もって何も申し上げず、突然、こういうお願いを申しあげましたのですが、快くお引き受けいただきました。豊田さんにお引き受けいただけるとなりますと、佐々木さんは、全然文句なしに「はい」と（笑）。それから、坂根さんも「はい」（笑）。豊田さん、佐々木さん、坂根さんまでいきますと、後はすんなりいきました。

それから、この本の英訳をどうしようかと思いました。いろいろお金をいただいても、またいろいろありますから、「豊田さん、すみません、このうち何十ページか、お願いできませんでしょうか」というような格好でやっていると、するするといきました。最初は全部ではなく 6～7 割ぐらいできればいいかなと思っていたのですが、結局、鈴木先生、95%ぐらいいきましたかね？

そういうことで話が進み、「これはいいぞ、それならば」といって、皆さん

が、いろいろ、「シンポジウムをやれ」というようなことになりました。やるなら、やはり国際的にやるしかない。時期的にいろいろなことを考えると、先週、アジア品質ネットワーク（ANQ）の会議が台北でありました。ですから、その後にはやればということで、東大の水流先生にお願いし、「やるなら東京大学でやった方がいい」ということで、おそらく皆さんの中には初めて東大にお出でになった方もいらっしゃるのではないかと思います。石川先生、ここは赤門ですが、正門のほうですが、先生は長年ここにいらしたという格好で、そういう意味でシンポジウムの開催。シンポジウムの開催ということになると、またいろいろ費用がいるということで、ご寄付等、ご協力をお願いいたしましたところ、皆さん、（配付資料の）要旨集 101～102 ページに組織委員、実行委員が載っていて、この英訳にご協力いただいた方が 103 ページに載っています。この英訳をやるということについても、各企業でやっていますから、必ずしもなかなか統一したトーンでできないところがあります。必ずしも品質管理を専門でやっている方々がやっているわけではないということで、そういう専門の立場から、私が息子レベルとすると、孫レベルのお弟子さんを中心として、ここにある EQST（English Quality Securing Team）という方々がいろいろやってくさいました。

今度、そういう方々は、原文と英語の内容が合っているかどうかはチェックできるのですが、英語として良いかどうかというと、皆さん、「ジャパングリッシュ」の世界です。そういう意味でちゃんとということで、インド品質学会に大変なご協力を得ました。それが（要旨集の）103 ページの下に出ているこういう方々のボランティアの活動で、英語もチェックされています。おそらく皆さん、それぞれの会社で現地の会議に出られるでしょうが、そこで読んでいただいても非常に滑らかな英語になっているはずですよ。

さらに（要旨集の）104 ページ以降にずっと、ご協力いただいた方々、今日もたくさんおいでいただいています。こういう非常に多くの方々のご協力により、今日のシンポジウムが開催できたことを喜びたいと思います。

今日のシンポジウムでは、2つの点、一つは石川先生の偉業と人柄を偲ぶということ、もう一つは、先生のそういうご偉業を踏まえた上で、今後について考

える。そういう視点から、海外 4 人、国内 6 人のスピーカーの方にお話をいただいたわけですから。質疑応答も大変活発にいただき、大変良かったのではないかと喜んでおります。皆様のご協力に感謝したいと思います。

最後に一つ、石川先生は凄い、凄いという話ばかりですので、少し変わったエピソードをご紹介します方がいいかなと思います。あまりご存じの方はいないかと思っております。先生は、われわれ学生を必ず正月に、ご自宅にお招きいただきました。そういうところで、いつだったか、「先生、奥様とはどういうことか」ということで、だいたい先生の世代ですと、やはりお見合いです。「先生、奥様に出会うまで、何枚ぐらい見合い写真をご覧になったのでしょうか」とお聞きすると、先生いわく、「俺にとって 52 枚目だ」。大変自慢げに、「52 枚目だ」と。大变得意そうにおっしゃるので、蕙子夫人に「ところで奥様、先生はああいうふうにおっしゃっていますが、どういうふうにお感じですか」。すると奥様は、「いえ、全然かまいません。私は 52 枚の写真を見た後で主人の写真を見ました」と。「要するに 53 枚目ですね」、「53 枚目ですから」。要するに奥さまが一枚上ということですよ（笑）。

どちらかというと、石川先生は相当亭主関白だったのではないかと思います。今の事例からわかりますように、表面的には奥様に立てられていらっしゃいましたが、実質は奥様に牛耳られていらしたのではないかと、こんなエピソードをご紹介します。この会のご挨拶とさせていただきます。

どうも皆様、ありがとうございました。